

2019 年度 わがまち魅力化プロジェクト ～サステイナブルな地域社会の創生事業～ 【 事業報告概要版 】

1. 本事業の背景と目的

現在、わが国において少子高齢化、人口減少が進む中で、特に地方ではその影響が大きく、過疎や産業の衰退等、住民の暮らしに直結する課題が山積している。一方で、各地域には魅力ある資源（自然、文化・伝統、工芸、農水産物、歴史等）が存在しているのも事実である。多様性豊かな地域を残していくためには、その地域の魅力を発掘し、磨き、それを伸ばしていくことが必要であり、それが地域の豊かさや幸福へとつながる。さらに、そのような地域の魅力を効果的に発信することで、その地域に目を向けてもらい、交流やインバウンドにもつながられる。各地域には、それらを実現するための地域資源のポテンシャルが存在している。

地域活性化や地方創生等、魅力ある地域づくりに向け、現在、日本各地で様々な取組が行われている。その多様な取組の中でも、地域課題の解決に導く一つの手段として、「地域外」の視点や「若者」の視点の活用が注目されている。昨今、そのような活動に関わる地域外の若者（大学生等）も増えてきている。一方で、大学生等が地域課題の解決に取り組む上で、活動の継続性や組織的な支援などの課題も指摘され、また地域と大学や大学生との間を仲介するコーディネーター的な存在が不可欠との指摘もある。若者の発想と行動力を地方創生や地域の魅力化に資する力に変えていくためには、地域と若者のつなぎ役としてシンクタンクの役割も大きい。

そこで本事業では、複数年の事業期間を想定し、1 年目（2017 年度）の事業ステップとしては、関連する取組事例の情報収集を行い、さらに 2016 年より実践されている「日野町魅力化プロジェクト」*への参画を足掛かりに、日野町でのフィールドワーク等を通じて、持続可能な地域社会の創生に向けた取組のあり方、取組推進のためのプラットフォームのあり方等を検討してきた。それを踏まえ、2 年目（2018 年度）の事業では、「日野町魅力化プロジェクト」への継続的参画とともに、わがまち魅力化プロジェクトのパッケージ化の検討・試行、実践フィールド（地域）の拡大のための他地域へのヒアリング、プラットフォームの枠組みの検討を行った。3 年目である 2019 年度は、他地域への展開を実践するとともに、活動の発展的・継続的な仕組みづくりのための関係機関との連携づくりを行った。

* 日野町魅力化プロジェクト（わがまち魅力化プロジェクト）の概要

2016 年から 2018 年まで鳥取県日野郡日野町において実施した、大学生によるまち歩きプロジェクト。プロジェクトの目的は、高齢化と過疎で悩む町をフィールドに、大学生がまち歩きや体験等を通じて、まちの課題や魅力を探ることである。

- 2016 年、故・安田泰敏九段(囲碁棋士、元東京富士大学特任教授)が、地域おこし協力隊をハブとして大学生と町をつなぎ、双方の成長・発展につながるプロジェクトとして発案され始動。初年度は東京富士大学の企業ビジネス研究同好会の学生が中心に参加した。

* 安田泰敏九段は、2018 年 5 月 2 日に逝去されました。

- 行政・地域（行政、地域おこし協力隊、町議会、事業者、地域住民等）と、都市と地方の学生（東京富士大学・鳥取大学・島根大学等）のコラボレーションにより実施。
- 2016 年から 2018 年の 3 か年は鳥取県日野郡日野町、2019 年度は新たに山梨県市川三郷町をフィールドとして実施。

2. 本事業の概要

本事業は複数年の事業期間を想定し、初年度は調査研究活動をメインとしながら、実践活動を蓄積し、2年目にはプログラムの展開・開発、3年目には他地域への展開・連携強化をする期間と位置づけ事業を推進した。3年間の事業経緯は以下に掲載するとおり。

(1) 1年目事業の概要：トライアル・情報収集期間

(i) 全国事例の情報収集

魅力化プロジェクトに関連する学生によるまち歩き活動等、地域活性化に向けた取組事例や取組推進のプラットフォーム等の活動形態把握のために、情報収集・整理（先行事例研究）。

(ii) 日野町でのフィールドワーク

「日野町魅力化プロジェクト」（学生によるまち歩き活動）への参画、事前・事後の現地での地域情報収集・整理（住民や地域おこし協力隊等の関係者へのヒアリング）、フィールドワークから得られた示唆のとりまとめ。

- 
- “町民自らがこの地域のことを考え、実行すること”を前提に、「人づくり」「場づくり」「生業づくり」という観点から、今後の事業プランを町（行政）へ提案。
 - 事業の基盤づくりに向けて、以下の3点を翌年度に向けた課題とした。
 - (i) フィールド拡大・取組の普及に向けたプロジェクトのプログラム化
 - (ii) フィールド拡大に向けた各地域へのヒアリング、交流
 - (iii) 取組推進、事業継続性担保のためのプラットフォーム枠組み検討

(2) 2年目事業の概要：展開・開発期間

(i) 日野町でのフィールドワークのプログラム化

「わがまち魅力化プロジェクト」のパッケージ化も目指して、日野町をフィールドとして実施。参加学生がプロジェクトに目的意識と当事者意識をもって参画するための事前・事後の働きかけ（ワークショップ、アンケート等）をプログラム化。

(ii) 実践フィールドの拡大に向けた取組

「わがまち魅力化プロジェクト」の日野町以外の新たなフィールド開拓のため、複数の地域への訪問ヒアリング調査を実施。

(iii) プラットフォームの枠組み検討

取組推進のためのプラットフォームの枠組み（設立目的や役割、機能、連携先候補等）を検討。

- 参加学生に向けてプロジェクト前後においてフォローアップのためのワークショップ機会を設定。夏季休暇中のプロジェクトだけではなく、前後含めた年間のプログラムをパッケージ化した。参加者層を首都圏の大学生だけではなく、地元の高校生等も含める方針を検討したが、プログラム期間の調整が難しく実現には至らなかった。
- フィールド拡大のために、他地域へのヒアリングを実施。基本のプログラムパッケージをベースとしながら、各地域の特性・課題感やニーズに合わせてプログラムを提案することで、実現可能性が高くなることを確認した。
- プラットフォームの枠組み検討については、1年目事業から見えてきた課題（①参加学生の確保、②新規・継続自治体の確保、③事務局機能の体制整備）について、シンクタンクが果たしうる機能を整理した。
 - ①参加学生の確保
 - 既存の連携大学・学識者とのパイプ強化、過去の参加大学生の組織化
 - 地方創生関連の学部を有する大学等への新規アプローチ
 - ②新規・継続自治体の確保
 - 大学生や外部人材を活用している取組推進自治体への直接的アプローチ
 - 同様の既存の全国事例（プラットフォーム）との連携、関係団体からの紹介、本プラットフォームの会員団体からの推薦等といった間接的アプローチ
 - ③事務局機能の整備（体制整備）
 - 本プラットフォームの設立と JRI・SDRC の運営サポート

（３） ３年目事業の概要：他地域展開・連携づくり期間

（ｉ）市川三郷町での「わがまち魅力化プロジェクト」実施

日野町での実践をベースにパッケージ化した「わがまち魅力化プロジェクト」を、新しいフィールドである山梨県市川三郷町において実施した。

- テーマ設定：日野町に比して、多様な地域資源を有する一方、合併前の旧町単位（３地区）を超えた連携が薄い状況が見られたため、学生の視点で３地区それぞれの魅力をうまく融合させ「市川三郷町の魅力」として発信するにはどうすればよいか、を考えるようなテーマ設定を行った。

（ii）全国的な情報ネットワーク化に向けた連携づくり

上記（ｉ）のプロジェクトを地域外にも発信するためのイベントを実施するとともに、今後の地方創生に向けて核となる金融機関や地域のシンクタンクとの情報交換を行った。プロジェクトの趣旨に共感する組織・個人は集まってきたため、「共感」から「参画」へ結びつける仕組みづくりのための関係構築を進めた。

3. 総括

(1) 3年間の実践によって得られた関係性と知見

JRI が参画する以前の 2016 年度からの展開経緯を整理すると下表のとおりとなる。JRI 参画以降の 3 年間を総括すると、大学との関係、地域との関係、全国の関係機関との関係構築において、今後の活動基盤をつくることができた。

—大学との関係：参加学生募集にあたってのネットワークをつくるとともに、募集や学生向けフォローアップのノウハウを蓄積した。現在は 1 年度に 1 地域の実施としているため、今後、地域拡大をしていくための体制については課題が残っている。

—地域との関係：プロジェクト実施にあたり関係構築すべきステークホルダーの共通点を把握することができた。また、フィールドワーク等の実践活動を通じて、実践地域と密にコミュニケーションをとらなければ理解することが難しい壁・課題を認識することができた（地域内での「人間関係」に起因する課題、合併前の旧町村単位での関係性に起因する課題等）。これらの課題についての解決策の提示も、残された課題である。

—全国の関係機関との関係：表中にも記載のとおり、地域活性化センター、各都道府県東京事務所、地域シンクタンク、エコツツェリア協会等、プロジェクトの積み重ねを通じて、「共感の輪」を広げることができた。その関係の質を高めていくことが求められる。

今後のプロジェクト運営に向けては、プロジェクトの提供価値の向上とともに、持続可能な運営のための体制整備についての課題があり、今後に向けたアクションは事項で記す。

わがまち魅力化プロジェクト 4 年間の実践経過

	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
各年度の展開におけるポイント	地方創生・人材育成の理念のもとプロジェクトの開始	・JRI がコーディネート役として参画し試行的に運営 ・地域おこし協力隊が核となる形での企画・運営体制づくりを確立	・基本プログラムのパッケージ化 ・関係大学と参加学生の多様化 ・参加学生が実際に起業した実績	・他地域への展開を実践 ・地域特性に応じたプログラムのカスタマイズ ・地元地域の事業者への協力依頼を強化
参加大学	東京富士大学 島根大学 鳥取大学	東京富士大学 島根大学	東京富士大学 横浜国立大学 青山学院大学 フェリス学院大学 島根大学	東京富士大学 日本大学 横浜国立大学 慶應義塾大学 青山学院大学
コーディネート	東京富士大学 黒田教授(当時)	JRI	JRI	JRI
	全国の関係団体との関係構築（地域活性化センター、地域シンクタンク、各都道府県東京事務所等）			
フィールド	鳥取県日野町	鳥取県日野町	鳥取県日野町	山梨県市川三郷町
地域関係	鳥取県	鳥取県	鳥取県 * 地域金融機関、地元新聞社、ケーブルテレビとも情報交換	山梨県 * 地域金融機関、地域シンクタンク、地元新聞社とも情報交換

(2) ビジョン実現に向けて今後求められるアクション

①プロジェクトの提供価値向上のために

「地方創生のための人づくり（人材育成）・チームづくり」を進展させていくために、「特定フィールドでの活動」と「全国ベースでの事業」を両輪で展開していく必要がある。

ー特定フィールドでの活動

「わがまち魅力化プロジェクト」の実践について、山梨県市川三郷町という特定のフィールドで継続実施と深化を図る。

ー全国ベースでの事業展開

全国的な情報ネットワーキングに向けた動きを今後も実施し、まずは地域金融機関・地域シンクタンクを核とした情報網を形成し、勉強会や課題検討の場、研修機会等を設定、人材と情報のプラットフォームとなることで、地域での具体的な課題解決・事業化に展開していくことを目指す。

②持続可能な運営体制整備のために

ー人的資源面での課題

4年間の実践により、賛同者・協力者を拡大していくことはできたが、今後の事業展開・拡大に向けては人員体制に課題がある。JRIで担うべき役割をコア業務に集中し、それ以外の部分について賛同者・協力者の力を借り、活用していけるようにするため、賛同者・協力者を組織化していく。

ー財政的資源面での課題

鳥取県日野町での3年間の実践期間については、県および町からの協力も得ながら、地域おこし協力隊との協働事業として実施してきた。市川三郷町での実践については、賛同者からの協力金を得られるようになったものの、持続的に運営できるだけの財政的資源ではない。プロジェクトに係る多様なステークホルダー（町役場、町内外の事業者、町民、参加大学、その他）について、それぞれにとっての利益をより強く感じられるようなプロジェクトとしていくことが求められる。たとえば、参加大学生の地元事業者との連携強化（商品開発、販路開拓、インターンシップ等）、参加大学生の地域情報の発信力強化（SNS等による発信、町広報への外部視点の活用等）など、地域にとってのインパクトを高めることで、より多くの資金調達につなげ、持続的な運営体制づくりを実現していく。

発行 一般財団法人社会開発研究センター（SDRC）
一般財団法人日本総合研究所（JRI）
